

## SJ Interview

## SJ インタビュー



「高校生の自動二輪車等の交通安全に関する検討委員会」で議事を進行する稲垣さん

日本大学 理工学部 交通システム工学科 助教

ともゆき  
稲垣具志さん



## 埼玉県における「三ない運動」の見直しと今後の指導のあり方に関する議論をリード

新たな指導要項の制定を  
埼玉県教育委員会に提言

埼玉県は2016年12月に学識経験者、学校関係者、生徒の保護者、交通安全関係者等18人で構成される「高校生の自動二輪車等の交通安全に関する検討委員会（以下、検討委員会）」を設置。この検討委員会の会長を務めたのが稲垣さんだ。今年1月まで9回にわたる協議を重ね、2月に新たな提言を盛り込んだ報告書を埼玉県教育長に提出。公立高校で「三ない運動（免許を取らない・バイクを買わない・バイクに乗らない）」を推進してきた埼玉県教育委員会は、「高校生活にバイクは不要」とするこれまでの指導要項を見直し新たな指導要項の策定に取り組むこととなった。

検討委員会の会長として稲垣さんは「三ない運動」の継続か、廃止かということが議論の目的とならないよう配慮しながら議事を進めたという。「最終的に判断するのは教育委員会で、私たちはそのための材料を提供することが求められているからです。『三ない運動』をやめたと仮定して、高校生の二輪車利用を考えた時、安全を担保するために必要なことは何かを様々な立場から意見を述べていただき、それらを集約していこうと考えました。

そのため、二輪車の安全利用を担保する体制をつくるのが難しい、あるいは、体制をつくっても実効性がない骨抜き状態が懸念されるのであれば、「三ない運動」継続という結論もあり得たのだ。さらに当事者である高校生は二輪車の利用について、どのように考えているのか、稲垣さんは高校生へのアンケートを検討委員会で提案し、埼玉県内の高校生1640人に意識調査を実施。この中で「原付・自動二輪車等の免許取得、乗車に興味はありますか?」という質問に対して、「興味がある」「まあまあ興味がある」と回答した高校生は42%だった（四輪免許は81%が「取得したい」と回答）。「もっと低いと予想していたので、この結果は意外でした」。

**第一 これまでの「三ない運動」の精神を継承しつつ、高校生を取りまく社会環境の変化に整合した新たな指導要項を制定すること。**

**第二 自動二輪車等の運転免許取得者に対する交通安全講習の実施など、安全確保対策に万全を期すこと**

そして最終的に、検討委員会からの提言は上記の2つにまとめられた。

新しい指導要項を検証するための  
モニタリング組織の構築を

検討委員会は、免許取得を希望する生徒に対しては保護者との連名による届出書を提出すること、学校側に対しては免許を取得した生徒の把握と交通安全講習の受講を生徒に促すことなどを求めている。また、通学での二輪車利用については現行通り（公共交通機関がなく、自転車での通学が困難など特別な事情がある場合）となり、通学を認められた場合の車両は原付（50cc以下）とした。提言には「運転免許取得者に対する交通安全講習の実施」も明記されている。この点について、稲垣さんは二輪業界のサポートに期待を寄せる。二輪車の安全指導ができる先生方はごく少数で、安全運転教育のノウハウを有する二輪業界の協力がなければ意味のある交通安全講習は実現できないからだ。

報告書をまとめる中で、稲垣さんがこだわったのはモニタリング組織の構築を盛り込むことである。「交通安全講習の実施と合わせて、利用実態や交通事故の発生状況をモニタリングして、継続的にチェックする必要があります。そのために学校や保護者、教育行政、交通安全機関・団体、交通管理者や道路管理者による組織を立ち上げてほしいと思います。新し

い指導要項を検証するとともに、将来的な安全対策に活かすことができるでしょう」。

子どもが道路横断する時の  
判断能力を把握するために

土木工学を専門としている稲垣さんは、交通安全の領域でも子どもから高齢者、二輪車や自転車など幅広いテーマで研究を行っている。今、力を入れているのは子どもが道路横断する時の判断能力を保護者やドライバーに理解してもらうための普及活動だ。歩行中に子どもが死傷した交通事故の特徴は、子どもが道路に飛び出してしまうことが挙げられる。飛び出しの要因として、子どもの安全確認不足（認識エラー）が目されるが、自分に接近する車両を確認できていたとしても横断可否について正しい判断をする能力が欠如している点（判断エラー）もあると稲垣さんはいう。「道路横断のプロセスにおける子どもの判断能力の実態を把握することが、今後の安全対策や教育に役立つのではないかと考えました」。

そこで、稲垣さんは小学生を対象に道路横断実験を行ったのである。場所は東京都内の生活道路で、単路部の信号機のない箇所を選定した。実験参加者は小学2年生（12人）と5年生（13人）、成人（非高齢者13人）。一人ずつ歩道に立ち、接近する車両を確認しながら横断が可能かどうか判断してもらう（実験参加者は押しボタンを持ち、接近する車両に



実験区間周辺の概略図



実験実施地点の状況

対して横断ができないと判断したら押しボタンから指を離す。押ししている間はランプが光り、離すと消えるようになっている）。

小学2年生は道路横断する時の  
判断を誤りやすい

実験の結果、小学2年生はほぼ全員が車両の速度に関わらず衝突してしまうタイミングでも横断できると判断してしまうことがわかった。「接近する車両の速度が速いか遅いかはわかるのですが、それが横断判断とリンクしないのです。5年生は2年生よりも誤判断が少なくなっているので、成長とともに判断能力が高まっていることがうかがえます。しかし、2年生と同じ傾向がみられる子どももいました。2年生から5年生でも道路横断する時の判断能力は個人差がありますから、集合教育で対応するのは難しいと考えられます。そこで重要になってくるのが家庭での教育です。保護者が自分の子どもが正しい判断能力を備えているかを見極めた上で、道路の渡り方を教える必要があります」。

稲垣さんは小学校のPTAの会合などに出向いてこの実験結果を紹介し、保護者が交通安全教育に積極的に関わるようはたらきかけを行っている。その一方で、各地の安全運転管理者向けの講演でもドライバー側の理解も深めようと努めている。「子どもが自分のクルマを認知していることを周知し、生活道路で速度を抑制することの重要性を理解してほしいと考えています」。道路横断の判断能力に関しては高齢者に対しても同様の実験を行っており、今、その結果は分析しているところだ。

「エビデンスデータ（根拠となるデータ）を使って危険な状況を一般の皆さんに説明し、認識を改めてもらうことが私の使命だと思っています。これからも客観的に課題を示すことで、安全な道路環境整備や交通安全教育のあり方を提言していきたい」と稲垣さんは力強く語った。

※「高校生の自動二輪車等の交通安全に関する検討委員会」がまとめた報告書は以下のホームページで閲覧が可能。  
[https://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/f2209/documents/houkokusho\\_all.pdf](https://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/f2209/documents/houkokusho_all.pdf)